
勇者もそんなに甘くない

鵜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者もそんなに甘くない

【Nコード】

N0112R

【作者名】

鵜

【あらすじ】

俺は気が付いたらゲームの中にいた！何でか知らないがこうなったらからには勇者になって魔王を倒してやるぜ！突然ゲームの世界で冒険をすることになった主人公は魔王を倒しにいけますが・・・

「ここはどこだ？」

気が付いたら俺はそこにいた。

あたりを見回したらそこはみたこともない場所だった。いや、見覚えはある。だが、ありえない。なぜならこの光景は俺がさっきまでやっていたゲームのものじゃないか！？

そのことに気が付いて自分の服装を見ると服は安っぽい木綿の服、腰に下げているのは木刀だ。そう、俺がやっていたゲームの初期装備じゃないか！？

「まさかここはゲームの世界なのか？」

突然の展開に驚きながらも俺は興奮を隠せなかった、だってゲームの世界だぞ？冒険だぞ？俺が勇者だぞ？男ならこんなシチュエーションに燃えないわけがないじゃないか！！

これは多分俺の願望が現れた夢だろう、ならば夢が覚めるまではこの夢を満喫しよう！

「俺は勇者になって魔王を倒すんだ！」

俺はそう意気込んでまずは最初の町にむかったのであった。

スタート地点から最初の町まではモンスターにエンカウントすることもなく無事に町にたどり着いた。

「おおつ、ゲームでやったまんまの光景だ」

ゲームとまったく同じ、だが現実と変わらないリアルさを持った町並みに俺は感動を覚えながらもまずは井戸の前に立っているおじいさんに声をかけてみることにした。

「あの、すみません」

するとおじいさんは

「いらっしやい、ここはダリルの村だよ。」

とゲームとまったく同じセリフを返してきた。まさかと思って俺はもう一度声をかけてみることにした。

「あの、お名前は？」

「いらっしやい、ここはダリルの村だよ。」

と笑顔を浮かべながら一言一句まったくさっきと同じセリフを返してきた、嫌な予感があたってしまった。

(俺の夢なんだけどここまでゲームと一緒にしなくてもなあ・・・)

などと思いつながら俺は町の探索をすることにした。

思った通りどの人もゲームと同じセリフしか話さず武器もゲームと同じ値段であった、そして恐る恐る

タンスや机をあさっても誰も怒ったりなどしなかった。

やっぱりここはゲームの世界なんだと納得した後、俺は待望の冒険に出かけることにした。

村の外に出てしばらく歩いていると茂みからいきなり前方に何か飛び出してきた。

(とうとうモンスターのおでましか！)

そう思って武器を取り出し前を見るとそこには青くてゲル状の体を持ったファンシーな物体がそこにいた。

「スライムか！」

ゲームでおなじみのモンスターがそこにいた。

「こんなザコモンスター楽勝だぜ！」

俺は前に駆け出し手にした木刀で殴りかかった。ぺちゃっ、と確かな手ごたえを感じた俺は戦闘の勝利を確信した。

「楽勝さすが俺っ！」

この調子でゲームクリアだと思って再び歩き出そうとした時倒したはずのスライムが突然顔に飛び掛ってきた。

(まだ倒してなかったのか！？)

突然の出来事に俺は必死に振り払おうとするが手はスライムの体をすり抜けて引き剥がすことができない、そうしている内に息が切

れてきた。

(まずい!このままじゃ・・・)

段々と意識が遠くなってきた、そしてそのまま意識を手放した。なぜかその瞬間おなじみのゲームオーバーのBGMが聞こえた気がした。

俺は真つ暗な空間の中で独り浮かんでいた

(俺は負けたのか、スライムごときに・・・)

結構なショックを受けながらも俺は自分のゲームオーバーを悟った、夢の中とはいいざコモンスター相手に負けるのは悔しかった。

そうしている間に目の前が明るくなってきた、そろそろ夢から目が覚めるらしい。

(今度からはキャラが死なないように気をつけよう)

そう心に堅く誓いながら俺は光に包まれた。

鐘の音が聞こえる、人の話声が聞こえる。

俺は学校で寝ていたのか、かなり恥ずかしい夢をみてしまったと思いながらも目をあけた。

目の前に広がるのはいつもの教室

ではなく大きなステンドグラスだった。

「は？」

「おお勇者よ、死んでしまつとは情けない、魔王を倒さなければいけないというのに」

なぜか聞こえてくるのは先生ではなく神父の説教

（は、はは、ははは・・・）

どうやら困ったことに俺の冒険は魔王を倒すまで終わらないらしい。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます、初めて小説を書いたので色々(というか沢山)問題点があるとおもいますがもし感想などもらえたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112r/>

勇者もそんなに甘くない

2011年2月18日21時35分発行